



委員長
の招待席

初等・中等教育における 問題点とその解決

● 畑田耕一
大阪大学名誉教授

● 澁谷巨三軒 齊
兵庫県立豊岡高等学校教諭

● 巨三軒 齊
姫路工業大学名誉教授

社会の変化に伴い、教育を取り巻く環境が大きく変わってきた。国民全員が生涯学習を心がけ、家庭の文化的環境をよくしていくことが地域の文化・教育力を高め、子供に生きる力を養わせることになる。子供の教育における学校、家庭、地域社会それぞれが果たすべき役割を考える。

はじめに

学校教育の根本は、知識を教え、それを応用させるだけでなく、その背景にある物事の本質を考えさせることである。近年、社会の仕組みや人々の生活様式が次第に多様、複雑に変化し、教育の世界でも、個性化とそれに伴う多様化が求められている。個性豊かな国民の養成は、個性ある国家の建設のための必須条件でもある。このようなときに大切なのは、物事の根本原理や哲学をしっかりと考える力を養う教育である。例えば、小学生に円周率 π を教えるときに大事なことは、単に π は 3.14 であるということよりも、この値が 3 よりは少し大きい値であって、それはどのように考えればわかるかということである。つまり知識を教えそれを応用させるだけでなく、その背景にある物事の本質を考えさせる教育が求められているのである。

子供の教育は国民全体の責任である。学校から家に帰った子供が、学校で学んだことを生かして体験的に考え、行動を起こすことによって、学びの成果を挙げることができるかどうかは、家庭と地域の教育力にかかっている。保護者が、教育は学校が行うのが当然と考えてしまったり、塾の宿題ができないから学校の宿題を減らしてほしいとか、給食のメニューに子供の嫌いな物が入っていたなどと学校に訴えたり、あるいは、受験に合格することだけを求めて、いわゆる未履修問題のようなことを起こすようなことがあってはならない。

教員は高い倫理観を持ち、子供たちや地域の社会的ロールモデルにならなければならない

教員には高い倫理観と使命感が求められる。教員は子供にどのような教育をして、どのような人間に育てたいかという目標（教育観）を明確に持たねばならない。自分の授業や言動を常に見直し、改善できる力が必要である。子供たちの尊敬の対象となり、ロールモデル (role model) になるよう、自身の全人格の育成をしなければならない。教員の採用に当たっては、そのようなことのできる資質を備えた人材を教壇に送る努力と工夫が必要である。その一方で、このようなことのできない先生を管理職が他の



写真1 教育フォーラムの行われた国の登録有形文化財畑田家住宅全景 <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/index.html>

適切な仕事を与えた上で排除することも必要である。そして、定員増と給与の増額も含めて教員の待遇をよくし、優秀な人材を集めることのできる制度を構築することも必須といえよう。教員にも時間のゆとりを充分に与えて、子供と接することのできる時間と自己研鑽の時間を保障すべきである。従来はごく自然に行われていた教員相互の研鑽による授業力の向上が、今は難しくなっている。授業以外の様々な事務的業務や、本来家庭が行うべき生活支援的業務の発生が、先生の授業に向けるエネルギーを削ぐ事態になっていることが一因である。退職教員の再出馬による現職教員の指導や、教員免許更新制度をリフレッシュ教育に生かすのもその解決に役立つ。

小学校教育の重要性

小学校では、社会性を身につけるために、学校を挙げて、命の大切さを実感できる心地よい学級を作り、自分の考えを適切に表現する能力を身につけるとともに、他人をよく理解する努力をする子供を育てることが必要である。

小学校低学年では、基礎をしっかりと叩き込まねばならない。それは「読み書きそろばん」の基礎、あいさつの習慣、宿題をきっちりする習慣、運動場や教室で友達と一緒に遊べることである。基礎をきっちりできるようにした上で、高学年では日常生活の中から教材を選び、学びの「楽しみ」を伝えていけばよい。

いろいろな教科の中で、日本語の教育はすべてに優先する。日本語の基礎をしっかりと学習した上で、論理的思考力と表現力を身につけさせることが必要であろう。小学生も高学年になれば、たとえ、算数の解答であろうとも、数字や式のみの羅列ではいけないことをしっかりと理解させておく必要がある。



写真2 第7回畑田塾(2005年10月30日)。筑波大学名誉教授・ノーベル化学賞受賞 白川英樹先生のお話「セレンディピティーを知っていますか」 <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo-english/index.html> (Hatada Family House Association)

学問領域の面白さや夢を子供たちに伝えるためには、それを心の底から面白いと思う人が教えなければならない。誰でも、自分がよく知らないことについて、その面白さを語るのは容易ではない。したがって、小学校でも高学年では専科教員制の導入が望まれる。

住育の力と高齢者の力の活用

昔は、学校も子供の住む家も伝統的な木造住宅であった。このような建築には、我が国古来の文化伝統を伝える様々な先人の工夫や心が一杯詰まっていた。子供は旺盛な好奇心と想像力を駆使して、感覚的に伝統・文化・風習を学び取り、想像力を創造力につないでいった。今は、建物の多くが鉄筋コンクリートであり、日常生活で、建物の持つ潜在的な教育力が子供に影響する機会は、ほとんど失われてしまったともいえる。建物の持つ潜在的な教育力、すなわち、「住育」の力を子供の教育に生かす方策を考えてみてはいかがだろうか¹⁾。

日本古来の文化・伝統の継承を通して、日本人の「心」を大切に育てることは重要である。この観点からも、「人の心」が通った古い伝統的な建物を保存し、活用・継承していくことは大切な教育の一つであり、地域社会が果たすべき大事な役割であろう²⁾。祖父母をはじめとする高齢者がその豊かな経験を子供たちに伝えることも、子供たちの情緒を育み道徳的能力を向上させるのに重要であり、文化・伝統の継承に不可欠である。

家庭と地域社会は子供の教育を担う主役であり、学校の支援機関でもある

子供は学校、家庭、地域社会の中で学び、

育っていく。健全な子供の育成には、とりわけ、家庭環境が重要である。小学校高学年のときの家庭の文化的環境が、その子供の将来を決めるという調査結果もある³⁾。学校と家庭の関係がよくないと、子供に悪影響の出ることがある。例えば、母親が家庭で担任の先生の悪口をいうようでは、子供は先生を尊敬しなくなる。これでは、結局、子供がだめになってしまうだけである。また、若い母親たちの中には、自分の子供が担任教員に指導されると、まるで自分が担任に注意されたような気分になってしまう人もいるという。このような不安を解消するようなシステムを地域社会に作っておく必要がある。

また、現在は、家庭と学校が自分の子供だけでつながっていて、学校はお金を払って教育を買うところというような考えで結ばれており、様々な教育の問題点は「先生のせいだ」と済ませているように見えることがある。いろいろな事情で家庭が子供の健全な教育に寄与することが難しい場合、近所の人気がかけて、黙って見て見ぬふりをしながら支えていくような地域社会の再構築が必要である⁴⁾。教育とは「共育」であり「協育」である。特に、初等・中等教育では、住民の「おらが学校」の意識が大切である。住民一人ひとりの地元の学校に対する意識が高まれば、学校が活性化し、それによって地域が成長すれば教育はよくなる。この相乗効果は大きい。その意味では、小学校から学校選択制が敷かれることの功罪も、自分の子供のことだけでなく、広い立場から真剣に議論する必要がある。

最後に、真に成熟した民主主義社会の構築には保護者を含む市民全体が一所懸命生涯学習に励むことが必要であり、そのような社会では子供もまた勉強に精を出して明るい社会を開いていくはずであることを強調しておきたい。

- 1) 畑田耕一, 林 義久, 伝統的木造住宅の住育の力と歴史的建造物の保存継承, <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/jyuiku-pdf.pdf> (2007. 7. 1)
- 2) 文部省, 「小学校 文化や伝統を大切に育てる心」, 道徳教育推進指導資料 (指導の手引き 7), 平成 11 年.
- 3) 刈谷剛彦, 志水宏吉編, 「学力の社会学」, 岩波書店 2004, 127.
- 4) 驚田清一, 「哲学は面白い, 哲学を楽しもう」, <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/tetsugaku-washida.pdf> p.25 (2007. 12.28)



はただ・こういち
大阪大学名誉教授、大阪府登録文化財所有者の会会長。専門は高分子化学。小・中・高校への出前授業にも取り組む。



しばや・わたる
平成 14 年大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了。兵庫県立淡路高等学校教諭を経て平成 19 年より現職。



さんげん・おさむ
姫路工業大学名誉教授。専門分野は高分子化学。現在、兵庫県立大学工学部で工学基礎・世学を講ずる工学塾を開塾。

本稿は、2007年7月22日、小学校から大学までの教職員と管理職、教育行政担当者、臨床心理士など筆者らを含む14名が大阪府羽曳野市の畑田家住宅に会し、一般参加者も含めて、初等・中等教育における学校、家庭、地域社会の役割について議論を重ねた結果の報告書 <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/bun30.html> を、著者らが許可を得て短縮改稿したものである。